

福岡市
席田遺跡群
第1次発掘調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第44集

1977

福岡市教育委員会

福岡市
席田遺跡群
第1次発掘調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第44集

1977

福岡市教育委員会



空から見た早春の席田遺跡群

序 文

この報告書は、本市の重要施策の一つとして進められている『緑と人間味豊かな健康都市づくり』の基盤整備の一環として実施されている東平尾総合運動公園の建設に伴う、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

本調査は、昭和49年度の建設予定地内全域の分布調査に基づいて、昭和50年度から実施しております。

調査対象地域が80ヘクタールにも及び広大なため、調査は今後も継続して実施してゆく予定です。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように多くの成果をあげることができました。

本書に収録された資料が永く保存され、地域住民はもとより市民各位の文化財保護思想育成に活用されますとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

調査に際しましては、作業員の皆さん方をはじめ多くの方々のご理解とご協力をいただきましたことに、厚く謝意を表わす次第であります。

昭和52年3月

福岡市教育委員会

教育長 戸 田 成 一

凡　例

- 本書は、福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課の東平尾公園建設に伴い、1975年（昭和50）8月1日から1976年（昭和51）2月4日にかけて、福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係が実施した席山遺跡群第1次発掘調査の概報である。
- 「席田」は、発掘調査対象地一帯が1933年（昭和8）4月に福岡市に編入されるまで筑紫郡席田村であったこと、あるいは、この「席山」が古くはこの地区的郡名として延喜式等にみられるなど、歴史的に由緒あるということで、個々の遺跡の総称とした。また、各々の遺跡名は、現在の字名をもとにして小字名を付して呼ぶことにした。
- 本書の執筆、編集は福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係員の飛高憲雄、井沢洋一の両名が担当した。
- 本書巻末に収録した北ノ浦古墳の地形測量等に関しては、地主の関義太郎氏のご協力を得ました。

卷頭図版

空から見た早春の席田遺跡群
撮影 1975年（昭和50）3月4日
高度 1,200m
縮尺 1/8,000

「本書巻頭に掲載した空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の空中写真を複製したものである。
(承認番号) 昭52九複、第6号」

目 次

I	席田遺跡群の発掘調査に至るまで……	(11)
II	席山遺跡群第1次発掘調査組織……	(14)
III	席田遺跡群の立地と周辺の遺跡……	(15)
IV	席田遺跡群第1次発掘調査の経過……	(20)
V	貝花尾1号遺跡……………	(25)
VI	貝花尾2号遺跡……………	(27)
VII	貝花尾1号墳……………	(28)
VIII	席田遺跡群の第2次発掘調査遺跡……	(29)
	新立表古墳……………	(29)
	中尾遺跡……………	(31)
	堤ノ上遺跡……………	(31)
	貝花尾2号墳……………	(31)
	大谷遺跡……………	(32)
IX	おわりに……………	(33)
付	北ノ浦古墳……………	(34)

図 版 目 次

- 卷頭図版 空から見た早春の席田遺跡群
- 第1図版 席田遺跡群の遠景（西方より）
- 第2図版
(1) 空から見た貝花尾地区（南方より）—福岡県文化課提供
(2) 貝花尾1号遺跡の全景（北方より）
- 第3図版
(1) 貝花尾1号遺跡の溝状造構（東方より）
(2) 貝花尾1号遺跡の溝状造構（西方より）
- 第4図版
(1) 貝花尾1号遺跡出土の遺物（石器）
(2) 貝花尾1号遺跡出土の遺物（土器）
- 第5図版
(1) 貝花尾2号遺跡の遠景（西方より）
(2) 貝花尾2号遺跡の全景（南方より）
- 第6図版
(1) 貝花尾2号遺跡の溝状造構（南方より）
(2) 貝花尾2号遺跡の溝状造構（西方より）
- 第7図版
(1) 貝花尾2号遺跡の岩盤露出状態（北方より）
(2) 貝花尾2号遺跡の土器出土状態（南方より）
- 第8図版
(1) 貝花尾1号墳の遠景（南方より）
(2) 貝花尾1号墳の近景（西方より）
- 第9図版
(1) 空から見た貝花尾1号墳（南方より）—福岡県文化課提供
(2) 貝花尾1号墳の全景（南方より）
- 第10図版
(1) 貝花尾1号墳の石室（北西より）
(2) 貝花尾1号墳の石室（南東より）
- 第11図版
(1) 貝花尾1号墳石室内遺物の出土状態（南東より）
(2) 貝花尾1号墳石室内遺物の出土状態（北東より）
- 第12図版
(1) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄鍔）
(2) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄鍔）
- 第13図版
(1) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄器）
(2) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（土器）
- 第14図版
(1) 空から見た北ノ浦古墳（南西より）
(2) 北ノ浦古墳の遠景（南方より）
- 第15図版
(1) 北ノ浦古墳の全景（西方より）
(2) 北ノ浦古墳の墳丘西部（南方より）
- 第16図版
(1) 北ノ浦古墳の石室（南西より）
(2) 北ノ浦古墳石室内出土の遺物（鉄鍔）

捕 図 目 次

第1図	福岡市天神の中心街	(11)
第2図	席田総合運動公園建設予定地	(11)
第3図	席田遺跡群分布調査図及び字図	折り込み
第4図	東平尾公園計画図	(13)
第5図	月隈丘陵から見た福岡平野	(15)
第6図	福岡平野全図	(15)
第7図	下白井遺跡	(16)
第8図	青木遺跡	(17)
第9図	席田遺跡群と周辺の遺跡	(19)
第10図	貝花尾1号遺跡土層断面図	(21)
第11図	盛夏の貝花尾1号遺跡の調査	(22)
第12図	貝花尾1号遺跡溝状遺構の追求	(22)
第13図	貝花尾2号遺跡の調査状況	(22)
第14図	席田遺跡群の第1次発掘調査遺跡と周辺の遺跡	(23)
第15図	貝花尾1号墳の石室清掃状況	(24)
第16図	嚴寒の遺跡で暖をとる調査員一同	(24)
第17図	貝花尾1号遺跡出土の石器実測図	(25)
第18図	貝花尾1号遺跡地形測量図	(26)
第19図	貝花尾1号遺跡溝状遺構実測図	折り込み
第20図	貝花尾2号遺跡及び貝花尾1号墳地形測量図	折り込み
第21図	新立表古墳の石室	(29)
第22図	席田遺跡群の第2次発掘調査遺跡と周辺の遺跡	(30)
第23図	中尾遺跡全景	(31)
第24図	堤ノ上遺跡全景	(31)
第25図	貝花尾2号墳遠景	(31)
第26図	古墳群遠望	(32)
第27図	大谷遺跡全景	(32)
第28図	北ノ浦古墳の石室調査状況	(34)
第29図	北ノ浦古墳地形測量図	(35)
第30図	北ノ浦古墳石室実測図	(36)

I 席田遺跡群の発掘調査に至るまで

九州の主都福岡市は、福岡県の県庁所在都市で、1889年（明治22）4月1日の市制施行以来幾多の町村を編入して現在、人口1,024,005人、面積334.78km²の大都市である。

名実ともに九州の表玄関を目指す福岡市は、1972年（昭和47）4月に政令指定都市となり、政治、経済、文化の面でも著実な発展を遂げつつある。現在進められている大きな事業として、地下鉄建設及び美術館の建設準備等が挙げられる。

さて福岡市は、国際的な競技大会を目指し、1978年の第8回アジア競技大会を誘致すべく財界、スポーツ関係者、行政関係者等による主競技場の建設専門委員会を1971年（昭和46）2月に設置し、主競技場の建設地として福岡空港東側山間部、香椎浜埋立地、南庄地区、野多目的国立がんセンター用地、雁ノ巣飛行場跡の五カ所の候補地を挙げ、その後の関係者等の現地調査で候補地を福岡空港東側山間部にしぼった。

1972年（昭和47）初め、福岡空港東側山間部の米軍板付基地弾薬庫跡地が米軍から返還され、同年8月、国有財産審議会で返還された跡地の中の約75万m²を福岡市に無償貸与することが決まった。

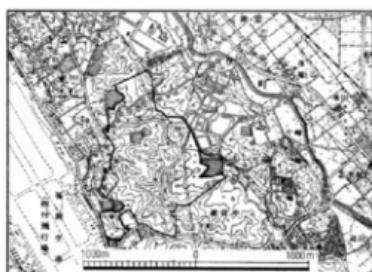
一方福岡市は、1977年（昭和52）完成を目標に総合運動公園建設の計画を進め、1972年9月26日、建設を推進する窓口である福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課より、計画予定地内に予想される埋蔵文化財の分布調査の依頼が福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係

にあった。

直ちに文化課は担当者を現地に派遣し、埋蔵文化財の分布調査を実施した。しかしながら現地は、樹木、下草等が繁茂して充分な踏査ができなかったため、これらの伐採ののち、再度、埋蔵文化財の分布調査を実施したいが、少なくとも図示した個所は試掘の必要がある旨の意見を添えて1973年（昭和48）3月末に公園建設課に分布調査の結果を報告した。（第3図）



第1図 福岡市天神の中心街



第2図 席田総合運動公園建設予定地

1973年7月9日、公園管理課より文化課に現地の下草刈作業が終了（900万円をかけて2月3日から3月24日にかけて実施したこと）したので、埋蔵文化財の分布調査を再度実施してもらいたい旨の依頼があった。これと前後して、6月23日、26日に総務局スポーツ青少年対策室スポーツ振興課、都市計画局公園緑地部緑地課、教育委員会社会教育部体育課等と協議がもたれ、現地踏査の要請を受けたため、文化課では6月29日に未踏査区域の埋蔵文化財の分布調査を実施した。

しかし、現地は立木、下草等が繁っていて、またもや充分な調査ができる状況ではなく、その旨の意見を添えて7月18日に公園建設課に報告した。

福岡市は、1973年7月、埋蔵文化財の分布調査の結果に基づいて社団法人日本公園緑地協会に基本設計を委託し、翌1974年（昭和49）1月にその報告を受けた。

その間に、第8回アジア競技大会がシンガポールで開催されることになり、当初の目的を失った。そのため、事業計画の大幅な変更を行い、1975年（昭和50）から10ヵ年で完成させ、当初考えていたような国際競技を目的とした施設ではなく、総合公園（東平尾公園）とし、その中に市民の健全なる憩いの場としての運動施設を配置し、既存の樹木をできるだけ残して緑の保全を図るという基本方針が打ち出された。

その後、第8回アジア競技大会開催国に決まったシンガポールも経済的な理由から開催を返上し、一時はパキスタンが開催を申し出ていたが、これも経済的理由から返上し、先ごろ、加盟諸国で経費を分担してタイのバンコクで1978年の12月に開催することが本決まりになった。

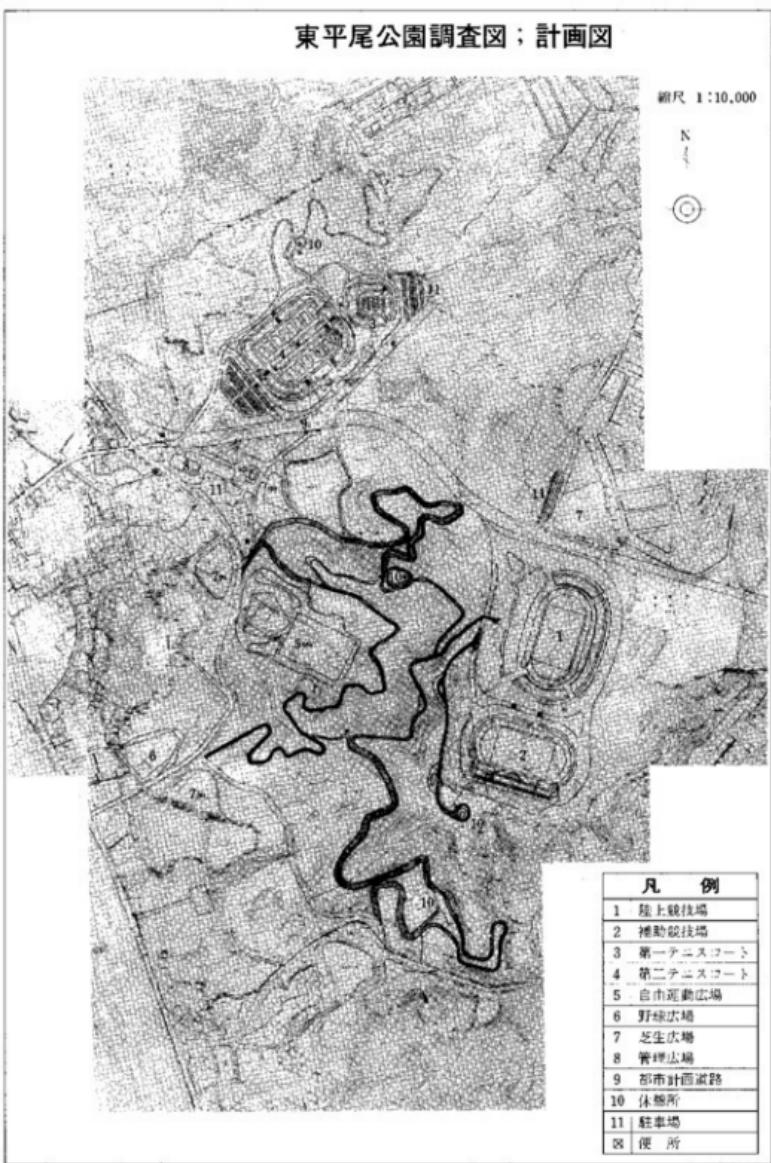
1974年4月22日、都市計画局より第一期計画分としての「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財発掘調査の依頼があり、文化課では、昭和49年度後半の事業として予定に組み入れ、東平尾公園建設予定地所管の大蔵省北九州財務局に対して、旧米軍板付基地内立入及び施設等の借用を申し入れ、福岡市博多区大字東平尾229番1に位置する旧米軍の火薬庫を発掘調査事務所として利用できるように整備した。

しかしながら、昭和49年度前半の事業の実施が年度一杯かかったため、予定地内の埋蔵文化財の再度の分布調査にとどまった。

1975年（昭和50）4月25日、公園建設課より「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財の分布調査の報告を求められたため、図面を添えて4月30日に報告した。

6月11日、文化課埋蔵文化財係では昭和50年度の事業の打ち合わせを行い、8月1日より3ヵ月間の予定で「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の第1次発掘調査を実施することになった。

東平尾公園調査図；計画図



第4図 東平尾公園計画図

II 席田遺跡群第1次発掘調査組織

調査委託者	福岡市都市計画局
調査主体者	福岡市教育委員会
調査担当者	福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係 飛高憲雄 木村義一（事務担当） 井沢洋一

発掘調査に当たっては、多くの方々からご協力をいただきました。ここにその方々のお名前を記して、改めて感謝の意を表します。（以下敬称略）

調査補助員	吉原淹雄（青山学院大学学生）	田丸雅之（福岡大学学生）
調査作業員	安部国恵	安部サエ子
	井上信香	大部茂久
	川崎正伸	
	河辺チサエ	関アサ子
	関加代子	関スマ子
	関高子	
	関ヒサ子	関政子
	関峰子	中牟田光
	原勇次郎	
	広田熊雄	安川菊代
	安川重臣	安川初枝
	八尋金之	
	山内タツ子	
		（五十音順）
地元協力者	関誠之助	関義一
	関義太郎	橋本憲一
	吉原肇	山本国光
	吉村武雄	

また、発掘調査期間中の食事の世話、出土遺物の整理等に梶川洋子、関富子、新野英子、八山美穂子の諸氏には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

III 席田遺跡群の立地と周辺の遺跡

福岡平野は東に三郡山地、南から西にかけては背振山地が横たわり、北方には博多湾が広がる面積約240km²の沖積平野である。福岡沖積平野を平尾丘陵（最高は標高100mの鴻ノ巣山）によって東西に分かれ、東部を福岡平野、西部を早良平野と呼ぶこともある。

平野内には石炭を含む古第三紀層の低丘陵や洪積台地が散在し、これらの丘陵や台地は古くから人々の生活の場として利用されていたようで、数多くの遺跡がある。

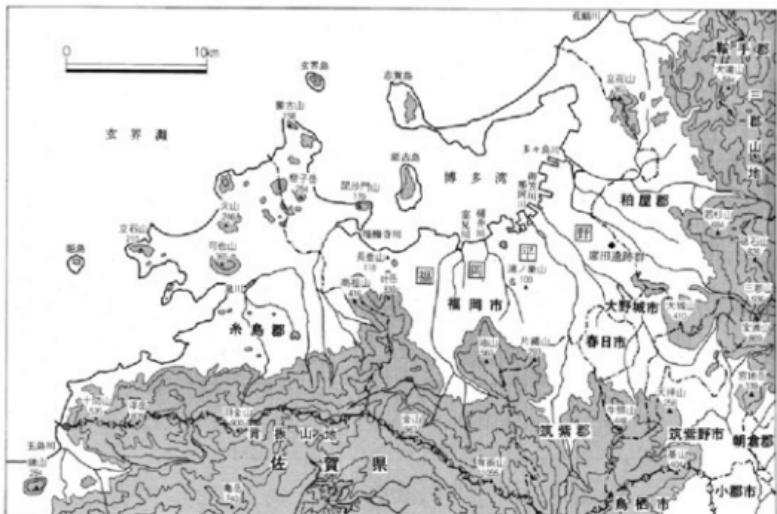
さて、福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410m）の山麓に、南東から北西に延びる古第三紀層によって形成された月隈丘陵がある。

席田遺跡群は、この月隈丘陵の北端に近い博多区大字東平尾及び雀居にかけての地区に分布する。その位置は福岡空港滑走路中央部の東側にあたり、丘陵の現状は雑木の混交林である。

席田遺跡群の分布する一帯は最高88mの標高をもつが、ほぼ南北に山稜線が走り、この東側



第5図 月隈丘陵から見た福岡平野



第6図 福岡平野全図

は旧米軍の弾薬庫建設に伴う掘削等により旧地形を留めていない。また丘陵には数多くの谷が切り込まれており、幾つかの谷の奥にはこの地形を利用した用水池が見られる。

席田遺跡群の調査が東平尾公園建設設計画に添って、遺跡確認、試掘、場合によっては本調査という作業サイクルで回転させなければならないため、遺跡群の全容は最終年度の調査が終了しなければ明らかにならない。そのため、ここでいう席田遺跡群の立地とは、厳密には第1次発掘調査によって確認された遺跡群の立地ということである。

第1次発掘調査の結果、遺跡は標高20m～40mの間に分布し、中でも20m～30mにかけての緩傾斜地及び丘陵頂部には古墳が残されていることが明らかにされた。また現水田面との比高は、低いところで10m、高いところで30mを計り、遺跡の分布は丘陵の南側及び西側において特に顕著である。

席田遺跡群の位置する一帯は、戦前は平尾炭鉱として栄え、1944年（昭和19）に旧陸軍が板付飛行場（現福岡空港）を強制収用した頃から弾薬庫に利用し、戦後は永らく米軍板付基地の弾薬庫となった関係で埋蔵文化財の分布の実態も明らかでなかった。かつて行われた分布調査⁽¹⁾の折にも対象地から外され、埋蔵文化財の空白地になっていた。

唯一発掘調査が行われた遺跡として現席田中学校の敷地内にあった宝満尾遺跡⁽²⁾を挙げることができる。

月隈丘陵における遺跡の分布に関しては、山崎純男氏によって詳細な発表がなされており、またその後組織的な分布調査が行われていないため、ほとんど追加することもないが、その後の様子などに触れてみたい。

先土器時代及び縄文時代の確たる遺跡の発見はその後もないが、今回の貝花尾1号遺跡の調査で出土したポイントが、あるいは先土器時代に属するものであるかもしれない程度である。この時期の月隈丘陵の歴史は、今後の調査に期待されるところが大である。

月隈丘陵の歴史でわれわれの前に明らかになるのは、弥生時代以降であるが、その大部分は墓地であり、生活跡が確認されているのは宝満尾遺跡と上ノ浦池遺跡である。これに対して

壇棺墓等の墓地はかなり数多く丘陵上に残されていた。その幾つかを挙げてみる。

まず月隈丘陵の北端の博多区大字福城の松ヶ浦池の西側ではかつて土取り作業中に6基の中古の壇棺が確認されていたが、その後の宅地造成によってほとんどが破壊されてしまった。（下白井遺跡）

次に、博多区大字青木の大正池西で同じく土取り作業中に中期の壇棺が出土し、人



第7図 下白井遺跡

骨の保存状態も良かったらしいが、この遺跡もほとんどが消滅した。（青木遺跡）

この青木遺跡の南側の斜面で現在畠地になっている字成岡や地様神社の西側からも弥生式土器、須恵器及び青磁器の破片等が採集されているため、この一帯は遺跡群であると考えられるが、周辺はすでに住宅地となっており、遺跡を面でとらえることは今後とも難しいと思われる。

このように弥生時代の遺跡が幾つか確認されているのに対して、古墳時代の遺跡、中でも古墳の存在はあまり知られていない。埴丘及び石室上部はすでに破壊されているが、現存するものとして挙げ得るのは北ノ浦古墳のみである。

これに対して席田遺跡群の南方の博多区大字下月隈以南の月隈丘陵上には、弥生時代の斐棺墓地も多いが、古墳が数を増し、群を形成している。古墳群としては 114基以上から成る持田⁽³⁾ヶ浦古墳群を最大として、14基以上の堤ヶ浦古墳群等が頗著なものであるが、これらの実態は不明である。

(4)

江戸時代の記録によれば、この月隈丘陵の金ノ隈、上月隈、下月隈等には穴塚、石窟あるいは石穴すなわち古墳が特に多いことがうかがえる。同時に盗掘も盛んに行われたらしいが、これにも副葬品の採集と、石材を求めての盗掘とがあったようで江戸時代の中頃には古墳の基數もかなり減ったと思われる。

奈良時代以降の遺跡として頗著なものは見当らないが、古記録等によれば、月隈丘陵の各集落の形成が相当古い時期にまでさかのぼるらしく、現在の集落と複合している可能性は充分にある。このような実態の中で、条里制に関係していると考えられる地名が博多区大字東平尾に「中ノ坪」として、また下月隈に「四ノ坪」として字名に残されている。

さて最後に席田遺跡群及びその近隣の遺跡の分布状況を見てみよう。

席田遺跡群の発掘調査に先立つ埋蔵文化財の分布調査では、樹木、下草等が茂っていて充分な現地踏査ができず、そのため発掘調査がまず試掘調査から開始しなければならなかったということはすでに述べたとおりであるが、隣接地における遺跡に関する情報は地元の方々の協力を得て発掘調査期間中に幾つか入手することができた。以下、概略を遺跡ごとに記す。

北ノ浦古墳

博多区大字東平尾字北ノ浦の丘陵上にある。本書に地形測量図等を収録した。

北ノ浦遺跡

博多区大字東平尾字北ノ浦の丘陵南側斜面にあった斐棺墓地。北ノ浦古墳の南西100mの位置



第8図 青木遺跡

にあたり、1930年前後に道路建設に伴って破壊された。

堤ノ上遺跡

博多区大字東平尾字堤ノ上の今屋敷池を見下ろす丘陵南側斜面にあった甕棺墓地。北ノ浦遺跡の場合と同様に道路建設により一部を残して破壊された。

林崎遺跡

博多区大字東平尾字林崎の丘陵西側斜面にあった甕棺墓地。上取り作業中に出土したらしいが詳細は不明。隣接して「天神さま」と呼ばれる祠があり、この部分は周辺より一段高く、掘削をまぬがれているが、古墳の可能性もある。

久保園遺跡

博多区大字東平尾字久保園。天王山公園のある丘陵の西側斜面の畠地において、弥生式土器の破片等を採集した。

(2)

上ノ浦池遺跡

博多区大字東平尾字大谷の上ノ浦池の北側丘陵斜面。席田中学校の通学道路建設に先立つ試掘において弥生時代の住居址の一部と考えられる遺構を確認している。

(2)

宝満尾東遺跡

博多区大字下月隈字神尾。旧米軍が石油タンク埋設の折、大石の下より多数の甕棺を出土したらしい。

(2)

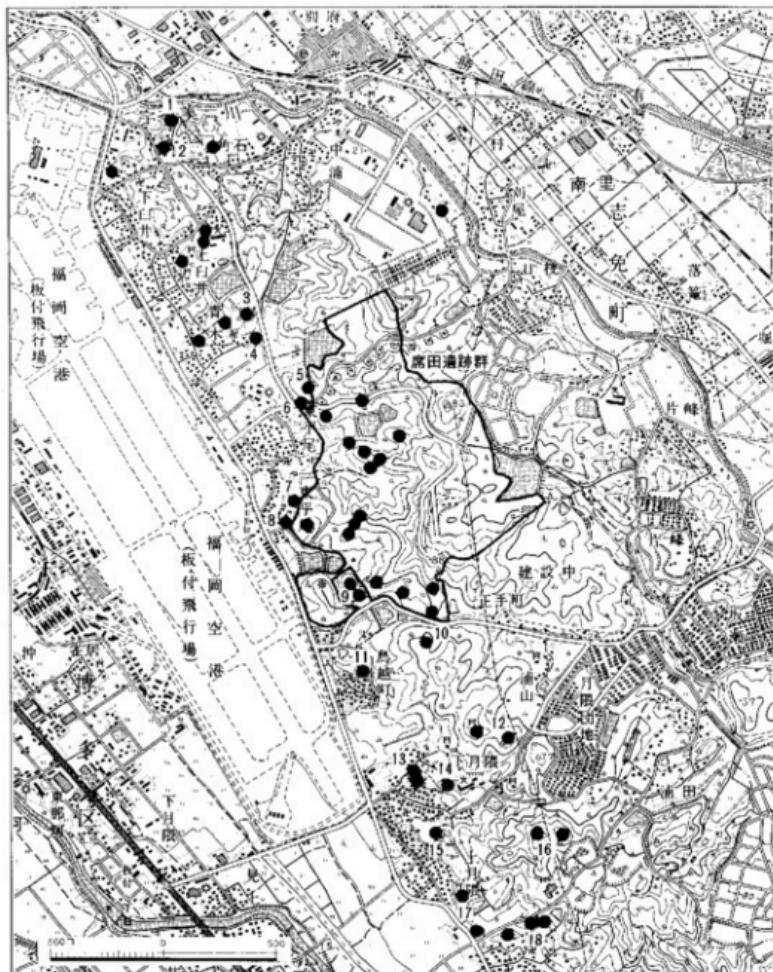
宝満尾遺跡

博多区大字下月隈字池尻、宝満尾にまたがる。古墳、袋状竪穴、上塙墓群、甕棺墓等が調査されたが席田中学校建設によって消滅した。

以上が現在までに知り得た席田遺跡群をとりまく周辺の遺跡の様子であるが、なお江戸時代の記録によれば、平尾村（現博多区大字東平尾）の南の道乗寺址といわれる所の東の山上に大塚があるという。また、村の東北に賛蔵庵址といわれる所があつて、その北の山上にも大塚がある、ということ等がうかがわれるが、これらに比定される遺跡は現在のところ不明である。

一方、天王山公園及び福岡市立席田会館のある博多区大字東平尾字天ノ王の丘陵上にも古墳があったのではないかという地元の人たちの話もあるが詳細は不明である。

この東平尾及び雀居の丘陵上には、数多くの遺跡がごく最近まであったということがわかつたが、いずれも宅地造成あるいは土取り等のために破壊されてしまった。また古墳に関しては江戸時代以降の盗掘によって大多数のものが破壊されてしまったようである。（第1図版）



1. 下白井遺跡

5. 北ノ浦古墳

9. 宝満尾遺跡

13. 天神森古墳群

17. 文殊谷古墳群

2. 下白井古墳

6. 北ノ浦遺跡

10. 上池古墳群

14. 下月隈遺跡

18. 谷頭古墳群

3. 青木遺跡

7. 久保岡遺跡

11. 雀居古墳

15. 上月隈遺跡

4. 成間遺跡

8. 林崎遺跡

12. 下月隈古墳群

16. 上月隈古墳群

第9図 席田遺跡群と周辺の遺跡

本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地図を複製したものである。
(承認番号)昭52九複、第6号」

IV 席田遺跡群第1次発掘調査の経過

席田遺跡群の第1次発掘調査は、東平尾公園建設計画に添って、まずサイクリングロード建設予定地内の貝花尾地区から始められた。分布調査の時点では、貝花尾の丘陵頂部に古墳と思われる高まりが2カ所認められた以外は、まったく確認されていなかった。特にこの東平尾公園建設地区は面積も広大で、しかも過去に埋蔵文化財の調査例もなく、まったくの未開拓地であった。

東平尾公園の施設は、埋蔵文化財の分布調査の結果に基づいて、できる限り遺跡の破壊をさけた位置に配置したいというのが公園建設担当者の希望のようであったが、東平尾公園建設地区は面積も広大で、しかも戦後は永らく米軍の弾薬庫等があった関係で管理も充分に行届かず、下草等が繁茂した雑木林になっていて、分布調査の折にもこの点で現地踏査が難行した。そのため、表面観察だけでは当席田地区の埋蔵文化財の分布調査は充分なものとはいえないで試掘の必要性があるという報告を公園建設課に提出したことは前にも述べたとおりである。しかし予算等の関係で、分布調査の段階で試掘を行うことができなかっただため、本調査の要請を公園建設課からうけても、具体的にどの地点とどの地点のどの範囲を調査するという状態ではなかった。この点は、公園建設課としても充分に認識していたため、席田遺跡群の第1次調査はサイクリングロードの入口の部分すなわち貝花尾地区からはじめて、予算の範囲内でできるだけの路線を確保してほしいという事前の話し合いのもとで1976年（昭和51）8月1日に開始した。

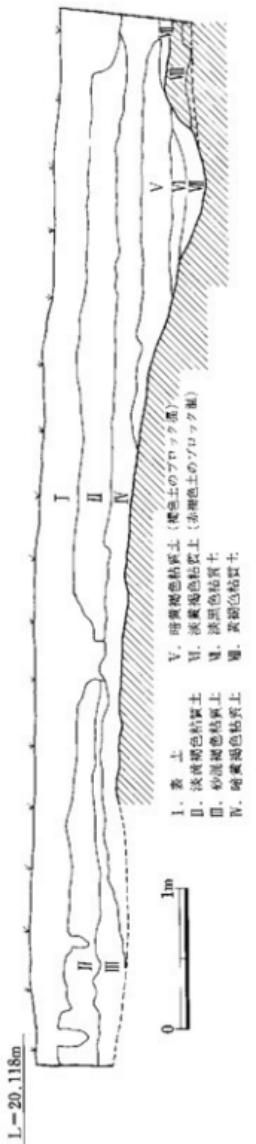
分布調査の時点では、この貝花尾地区は丘陵の頂部2カ所に古墳と思われる高まりが認められた以外は、まったく不明であった。このような不充分な分布調査をもとに施設の配置を決定しているため、今後の埋蔵文化財の調査は、施設の建設が予定されている地区内に埋蔵文化財がないかどうか、あれば本調査を行い、場合によっては設計変更を求め、できるだけ設計変更を行い、施設の建設を進めたいということが双方の合意点であった。

東平尾公園のサイクリングロード平面図によると、貝花尾地区では丘陵の裾に近い標高20m前後の斜面にサイクリングロードを建設するために、切り盛りの部分を含めると広いところでは30m前後の幅が調査対象となった。まず入口から貝花尾の丘陵の北側を通って新立表の丘陵に至るまでの約320mに及ぶ路線の下草等の伐採から作業を進めた。調査の開始が夏の暑い盛りであったため、暑さと時折やってくる雷雨等に悩まされたが、調査員一同の一致協力と頑張りによって伐採も順調に進んだ。

戦前の地図や地元での情報によって、貝花尾地区的丘陵の先端裾部には平尾炭鉱時代の住宅跡の存在が予想されたが、伐採の結果、数棟のレンガ造りの基礎が現われた。また、周辺は住

宅建設の折に整地したと思われるような、2段からなる平地を形成していた。このような点から地形はかなり変形していると考えられたが、遺跡の埋蔵が予想されたため縦横にトレーニングを設定し、試掘を行った。

まず下段の標高15m前後の位置に設定したトレーニングでは表土を除去したところ、直ぐに赤褐色を呈した地山に達した。現地表面から50cmほどの深さでそれ以上の発掘を中止した。表土中からの遺物の出土もまったくくなかった。トレーニングの断面観察の結果、当初予想されていたように上部がかなりの削平を受けているものという結論に達し、下段の発掘調査は行わないことにした。次に上段のトレーニングに希望を託して発掘を開始した。ところが、ここでも下段と同様に表土を除去し作業を進めたが遺物の出土をまったくみはずに、下段とは幾らかちがって土層に多少の変化は認められたが、まもなく地山に達した。このような結果をみるとこの地点は仮に遺跡があったにしても保存状態は良くないであろうと考えたが、上段のトレーニングに直角に新たにトレーニングを設定し、東方へ向って発掘を進めた。ここでも直ぐに赤褐色の地山に達したが、貝花尾の丘陵中央より東側にあたる部分では、少量ではあるが、弥生式土器の細片が出土し始めた。そこで充分な注意を払いながら作業を進めたところ、かつての炭鉱の住宅のレンガ造りの基礎の直下から安山岩製のポイントが出土した。出土した位置は、赤褐色を呈した風化土層の直上か、ややこの層にくい込んだと思われる場所であったが、住宅の基礎を入れるために幾分か掘られた溝の中からのようでもあった。引きついでの出土に期待をかけながら精査を行ったが、遺構らしきものも確認できず、単独出土という観を呈した。また弥生式土器の細片もこのポイントを出土した地点から東側に認められたやや暗褐色を呈した土中から集中的に出土するようであった。しかし特に遺構を伴うものではないようだという観察の結果から、このトレーニングをさらに東側へ延長



貝花尾1号遺跡土層断面図
Fig. 10



第11図 盛夏の貝花尾1号遺跡の調査



第12図 貝花尾1号遺跡溝状構造の追求



第13図 貝花尾2号遺跡の調査状況

して調査を進めた。その結果このトレントの東側のコーナーで、東から延びてきた溝状の落ち込みが、この部分で直角に近いカーブを描きながら北西へ向って丘陵斜面下方に延びていることがわかった。この落ち込みの中からは弥生式土器の細片が集中的に出土した。そこで、調査地区をさらに拡大するために東方の樹木、下草等の伐採を行い、表土は機械を導入して除去した。これに先立って、この溝状の構造が北西へ延びた先が直ぐ崖になっており、その下を炭鉱時代の道路が走っているため、この崖の断面と道路面で溝状構造の方向及び規模等を確認する作業を行った。その結果、道路面ではすでに地山が露出しており、溝状構造の輪郭が確認でき、そこから土師質の皿形土器が出土した。機械による表土の除去を行った地区的発掘作業をすすめ、部分的には不明瞭なところもあったが、貝花尾の丘陵裾部に近い所を横切るような形で、全長50m～60mに及ぶ溝状構造の出現をみた。

サイクリングロード・遊歩道に付随して、現在ある山道を整備する計画がある。この山道の整備は遊覧者の山裾や中腹での散策だけでなく、尾根上での展望をも楽しませようと思案されたものである。この尾根上の山道はほとんど手の加えられない施設といわれるが、各地の自然公園の実態を調査してみると、公園完成以後徐々に手が加えられてゆき、自然の大きな変貌をみることが多々ある。それ故に昭和50年度の調査では、サイクリングロード・遊歩道建設予定地の路線内調査と並行して、山道の整備が予定されている貝花尾の尾根上の試掘調査を行うことにした。

貝花尾の丘陵の尾根は、西方の御笠川、那珂川によって形成された福岡沖積平野に向って舌状に突き出し、標高40m～50m前後を計る。その幅は10m前後で狭長な尾根である。この尾根の南と北側は深く開析された谷になっており、谷を挟んで同様な丘陵が連続する。丘陵の基盤



第14図 席田遺跡群の第1次発掘調査調査路と周辺の遺跡



第15図 見花尾1号墳の石室清掃状況



第16図 脱寒の遺跡で暖をとる調査員一同

った。その結果、溝状遺構は北側の斜面に向って溝幅を扇状に広げながら次第に傾斜して消失することが判明した。この溝状遺構の西側では小さなPitが検出され、溝底あるいは溝の斜面からは弥生時代中期の土器片が多数出土した。こうしたことから、溝状遺構が単に丘尾を切断した溝ではなく、丘陵を整形して何らかの目的に供したのではないかと考える。これを貝花尾2号遺跡と呼ぶことにした。

尾根の中程と基部に近いところの2カ所に高さ1m～2m程の高まりが認められ、前者は山道に後者はサイクリングロード建設予定路線内に当っていた。いずれも古墳ではないかとの想定のもとに高まりの中心部を通るようにトレンチを十文字形に設定し試掘を行った。その結果、尾根の基部に近い高まりは、表土を除去すると直ぐに地山にあたり、種々検討したが古墳の存在その他の痕跡は一切認められなかった。

貝花尾2号遺跡の南東60m前後に認められた高まりでは、試掘の結果、ほぼ西側に向って開口する小形の石室の存在を確認し、これを貝花尾1号墳と呼ぶことにしたが、天井石等はすでに失っており、過去に盗掘を受けた様相を呈していた。当古墳も山道の建設に配慮すれば現状保存が可能なため、墳丘の測量と石室の実測及び副葬遺物の検出に努め、調査後は埋め戻しを行った。

は花崗岩であり、丘陵上では花崗岩と砂岩が互層をなす。

試掘調査は、この尾根先端の比較的平坦な部分と尾根中程の幾らかの高まりが認められる部分 2カ所の合わせて 3地点を選んで実施した。

尾根先端部では一部に花崗岩の露出がみられたが、 $60\text{m} \times 20\text{m}$ の調査区を設定し、 2m 四方のグリッドを組んだ。29カ所のグリッドの試掘の結果、標高41m前後では表土下に花崗岩あるいは砂岩の基盤が認められたが、標高41m以下になると部分的にローム層の堆積がみられ、上部の二次堆積土も厚さを増す。

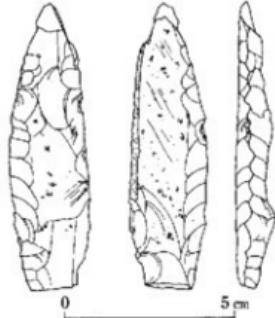
遺物としては、丘陵頂部の平坦地の露頭した岩盤の裂目等から弥生中期の土器片が数点出土した。E-15、16、17、F-15、16、17では、風化土を掘り込んでつくられたPitとともに、丘尾を切断したと思われる溝状遺構を検出したため、C-16、17、D-15、16、17の発掘を行

V 貝花尾1号遺跡

貝花尾1号遺跡は、博多区大字東平尾字貝花尾の南東から北西へ向って延びる丘陵先端の裾部に近い標高20m前後の位置にある。遺跡はL字形の溝状遺構と、弥生時代の遺物包含層からなる。また、ポイントの出土をみたことから、先土器時代の遺跡の存在も予想されたが、確定的な遺構は確認されなかった。いずれにせよサイクリングロードの建設予定路線内の発掘調査という制約があるため、遺跡の性格を明確に把握することは難しかった。以下、溝状遺構について述べてみよう。（第2・3図版）

溝状遺構は、貝花尾丘陵の標高18m～19mの等高線に添って南西から北東へ、全長約60mほどが確認された。南西部はカーブを描きながら丘陵裾部へ向って開口している。しかし溝底のレベルは、南西部と北東部がかなり低くなっている。あたかも山を越すような様相を呈している。すなわち南西部の溝底は標高約15.4mで、カーブをえがきながら丘陵上に向い、最高部では標高17.6mに達し、その先はまたゆるやかに下り、北東部では標高約16.9mとなる。溝の幅は0.7m～1mで、断面は、南西部のカーブするところではU字形に近いが、その他の部分では台形となっている。こうした事実は、一部では溝の觀があるが、全体としては、古い山道ではなかったかと思われる。また出土遺物としては、少量であるが弥生式土器の破片、土師器の破片等があったが、いずれも溝の埋土からの出土であり、遺構の時期を決定できるような出土状態ではなかった。いずれにしても今後充分に検討して、本報告の段階までには結論を出したい。

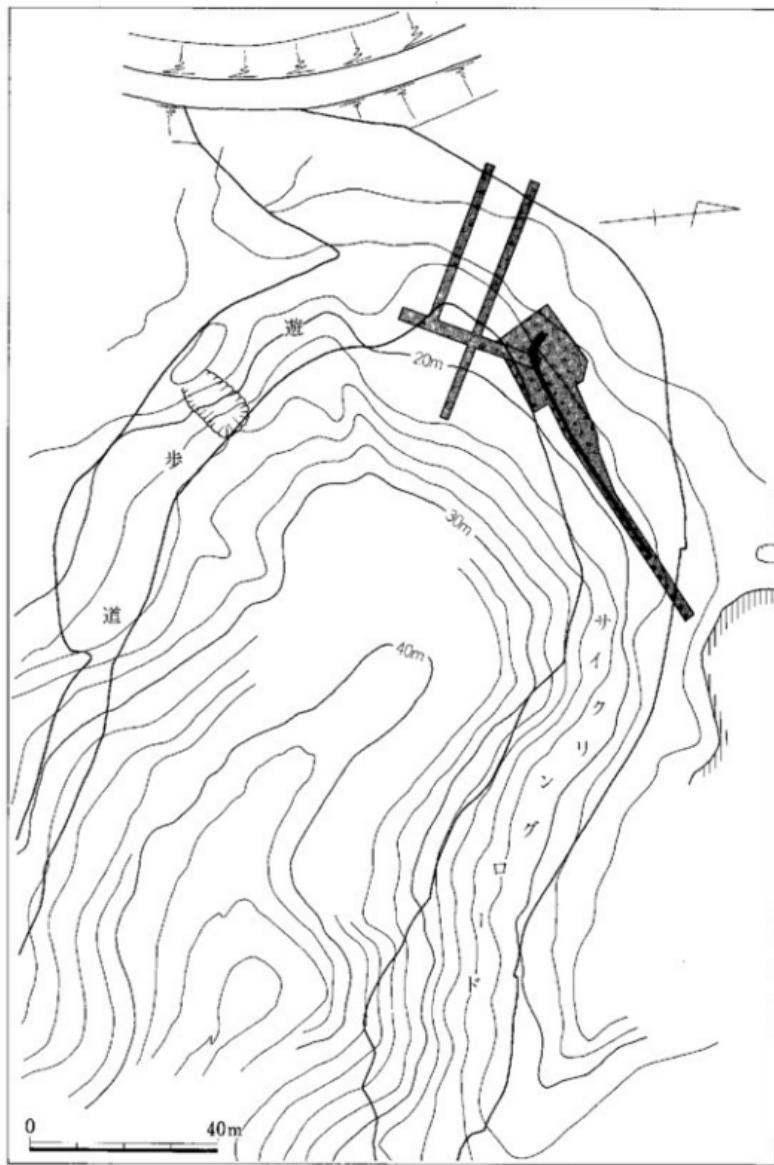
貝花尾1号遺跡出土のポイント



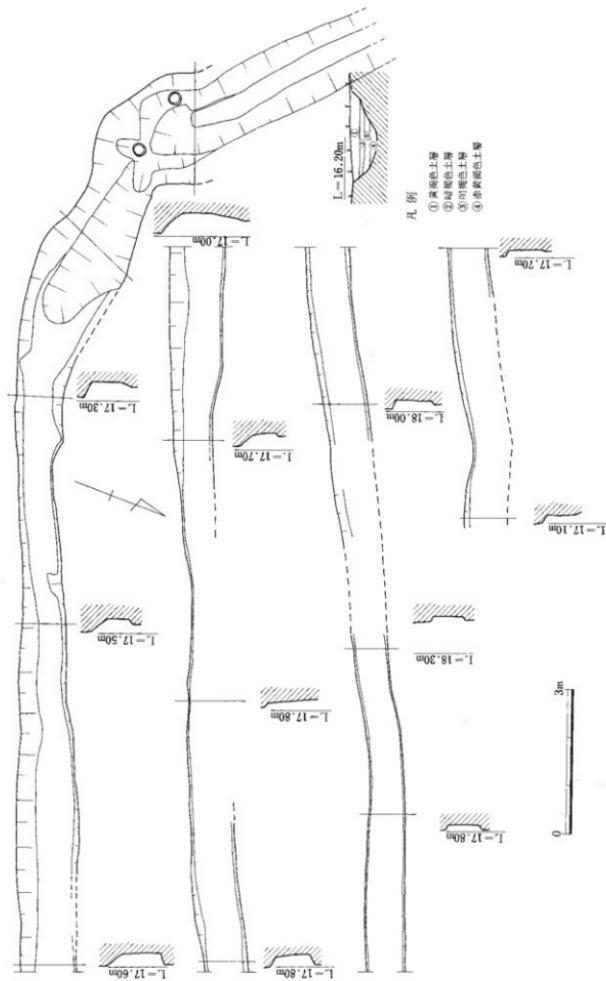
第17図 石器実測図

長さ8.4cm、幅2.3cm、厚みは約1cmのポイントである。安山岩で古色をおびて灰色を呈しているが破損部分を見ると黒灰色の緻密な石材である。片側だけに両面から非常に美しく並行して押圧剝離がほどこされているが、比較的厚く剥ぎ取っているため、刃部はかなりツイストしている。片面は自然面を多く残している。刃部の反対側は、厚く直角の背とも言うように自然面のまま残されている。これはポイントの未成品と考えることも可能であるが、片側のみの加工でも、ポイントとしての機能は有すると思われる。またナイフ形石

器としての機能も持つと思われるが、同類の石器の報告を見ぬため、くわしくは分らない。従って時期に問ても、採集地点の状態から考えて先土器時代に属するのか、あるいは弥生時代のものか定められない。類例の発表を待ちたい。（第4図版）



第18図 貝花尾1号遺跡地形測量図



第19图 贝花尾1号冲积带剖面图

VI 貝花尾 2号遺跡

貝花尾の第1試掘地点は、標高40m～50mの尾根先端部に位置する。尾根はこの部分で一坦平坦地を形成し、そこから急な傾斜で谷へおちる。この尾根は全長約300m足らずの短いもので、尾根基部から先端の平坦部までは約200mである。

発掘区はこの平坦面に長さ60m×22mの範囲で設定し、2m四方のグリッドを組んだ。グリッドの発掘は、平坦部中央の花崗岩板石の露出した部分(D-E 21, 22)を中心に進め、遺構の検出及び地層状態の調査を行った。尾根北側斜面にあたるA・B-21, 22, 23, 24の区域は炭鉱の豊坑が存在し、地形が著しく損われている。D-E-21, 22は板石が露出し、遺構の可能性を思わせたが、表土下は花崗岩と砂岩の互層による岩盤であった。C-23, F-19, 23, G-18, 24でも同様であり、H-20では尾根からの転石と二次堆積土の混層が50cm～60cmあって、その下が岩盤であった。F-13, H-7では表土下5cm～6cmで砂岩質の地山となり、表土の流出がみられる。F・G-29の両グリッドの層位は田状をとどめているらしく、砂岩質の岩盤上に赤褐色粘質土があり、次に黄褐色粘質土がのって、表土に至っている。本来こうした層位が尾根上にあったのが、谷へ流出したと思われる。

F-17では哉褐色粘質土に掘り込まれたピット1コを検出し、さらにF-15, 16では淡黒色粘質土で埋まった落ち込みを検出したため、E-15, 16, 17を発掘し、溝状遺構を確認した。さらにG-16, C-16, 17, 18, D-15, 16, 17の発掘の結果、溝状遺構はG-16地点では発見されず、F-16の中間を起点として北斜面へ下ることが判明した。

この溝状遺構は地山整形を目的として作られたもので、尾根平坦部では浅いV字状をなし、北側の谷へ向って溝は幅を広げながら、しだいに消滅して斜面に至る。溝状遺構の尾根平坦部での幅は約180cmで、深さは溝肩から40cmである。溝の土層は1～2層で、下層は淡黒色粘質土である。この溝の起点は幅約6mを計る尾根平坦部のほぼ真中からで、その西肩は起点から約5mで西方へカーブして消滅する。その結果、溝の西肩は矩形の台状を形成する。しかし、南側斜面では溝が検出されておらず、また、発掘の面積の少ないとから、この台状部が方形をなす遺構か、あるいは他の地山整形を施した遺構の一部なのか不明である。

土器は細片になっており、土器のセットは不明だが、變形土器の破片もみられる。時期は弥生中期前半に比定できる。なお、発掘区から6m西方では、表土下に岩盤を露出した。

(第5～7回版)

VII 貝花尾1号墳

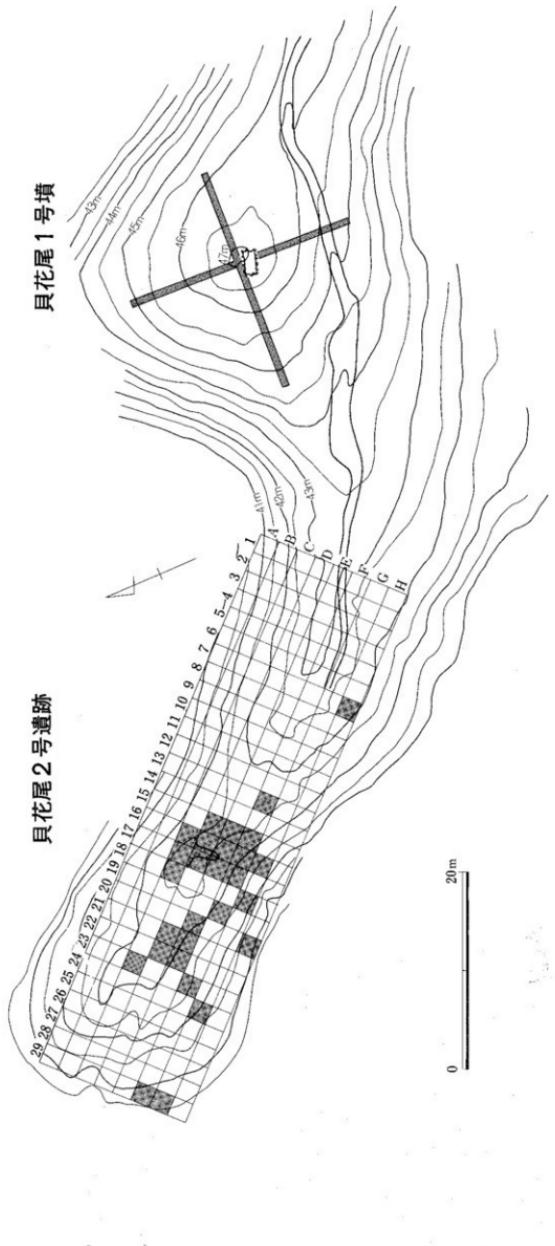
貝花尾の第2試掘地点で検出されたもので、位置は尾根基部と第1試掘地点の中間にある。約300mの丘陵稜線の北側のこぶ状の出張りに位置する。丘陵稜線はこのこぶ状出張りで一帯高くなり標高46m前後を計る。稜線は、このこぶ状出張りから南へ一段落ちて先端部へ至っている。1号墳の墳丘は直径約12mの円墳で墳丘頂部からの盗掘を受けている。現高は約90cmで、地山整形を行っている。盛土は旧表土と思われる黒色粘質土の上に、地山整形の跡を利用して行い、最も良好に残っている部分で約60cmの高さを計る。墳丘頂部の盗掘および盛土の流出を考慮しても、本来の墳丘はさほど高いものとは考えられない。しかし墳丘の現高は1mにもみたない低いものであるが、地形的に南西側が段落ちになって大きく傾斜するため、北方から見た墳丘にくらべて実際よりも相当大きくみえる。こぶ状の地形への占地と地山の整形は、ある意味では墳丘を南西方向に対して際立たせることを意図したのかもしれない。

墳丘裾の東・西トレーニチでは幅2m、深さ20cm程の層溝状のものがみられたが、南・北トレーニチでは地山整形時の痕跡しか認められなかったことから、墳丘下部の地山整形の区画を示すものと考えられる。

石室は墳丘のほぼ中心に位置していたものと考えられ、横口部をほぼ西方に定めた小形竪穴系横口式石室である。石室プランは長方形を呈す。南側壁の長さは約2.25m、北側壁の長さは、2.22m、奥壁部の幅は1.03m、横口部では0.90mを計り、壁の現在高は奥壁0.6m、北側壁では0.82m、南側壁が0.66mであった。側壁および奥壁は、大きめの石を腰石として据え、その上に腰石よりやや小さい石の小口をそろえて積み上げている。奥壁はほぼ垂直で、両側壁は持ち送り気味である。北側壁は上圧の関係により石室内に倒れ込んでいる。石室の壁の作りは横穴式石室に似ている。横口部は、長さ約48cmと約30cmの石を並べて腰石としている。また、石室内は敷石が施されていた。

遺物は、長さ約80cmの鉄製直刀1、刀子3、鉄鏃23、鎧先1、毛抜き1、須恵器・土師器の壺形土器等であった。（第8～13図版）

第20回 貝花尾2号遺跡及び貝花尾1号墳地形測量図



VIII 席田遺跡群の第2次発掘調査遺跡

席田遺跡群の第2次発掘調査は公園建設計画に添って、サイクリングロード建設予定地の新立表地区から開始されたが、調査途上で公園建設課より遊歩道の建設を急ぎたいということと、管理広場建設予定地の試掘を行ってもらいたい旨の要請があった。このため、第2次の発掘調査として1976年（昭和51）10月から1977年1月中旬にかけて、以下に記す地点の試掘ないしは本調査を実施した。

- ①博多区大字東平尾字新立表（サイクリングロード建設予定路線内）—新立表古墳
- ②博多区大字東平尾字中尾（管理広場建設予定地）—中尾遺跡
- ③博多区大字東平尾字堤ノ上（管理広場建設予定地）—堤ノ上遺跡
- ④博多区大字東平尾字貝花尾（遊歩道建設予定路線内）—貝花尾2号墳
- ⑤博多区大字東平尾字奥林（遊歩道建設予定路線内）
- ⑥博多区大字東平尾字大谷（遊歩道建設予定路線内）—大谷遺跡

以上の地点で確認された遺跡とその調査の概略を以下に記したい。

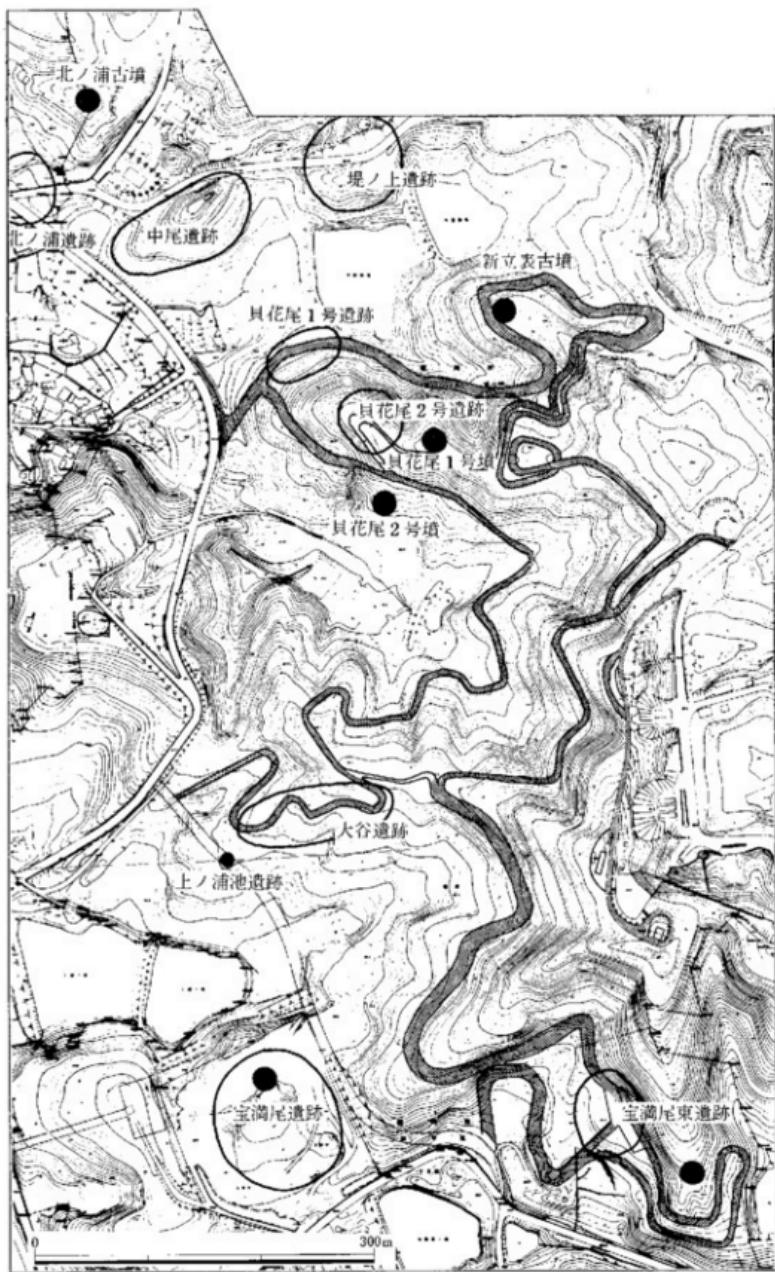
新立表古墳

第1次発掘調査が行われた貝花尾丘陵の北側に、谷を挟んで南東から北西へ延びる丘陵の中腹部のサイクリングロード建設予定路線内調査のための下草等の伐採時に、丘陵南側斜面の標高40m前後の地点で須恵器の破片を数点ほど採集したため、この地点の上方の尾根上を精査した。その結果、すでに埴丘及び石室の上部等は破壊されてはいたが腰石が残された古墳の存在を確認した。サイクリングロード建設計画平面図でその位置を検討した結果、埴丘の南側の裾の部分がわずかではあるが計画路線内に入っていることを確認した。公園建設課の建設担当者との現地における協議の結果、計画予定路線の設計変更が可能であるということで、周辺の地形測量と埴丘測量及び石室の実測等を行った。但し、当古墳が現状で保存されるということもあって、石室の床面その他の発掘作業を実施しなければ得られないデータの作製は行わなかった。

当古墳は、南西の丘陵斜面に向って開口する両袖の横穴式石室を内部構造として有す円墳？である。埴丘は直径10m以上を計るようであるが正確な数値は埴丘の高さとともに不明である。



第21図 新立表古墳の石室



第22図 席田遺跡群の第2次発掘調査遺跡と周辺の遺跡

中尾遺跡

遺跡は、現在、東平尾から柏屋郡志免町へ抜ける道路によって切斷されているが、もともとは北ノ浦の丘陵の南西へ延びる一支丘であった丘陵上に位置している。丘陵の稜線にそってトレンチを設定し試掘した結果、標高10m～26mにかけての3つの地点から遺物の出土をみた。トレンチによる発掘調査という事情から、明確な遺構は検出できなかつたが、遺物としては、弥生時代中期の土器の破片を得た。器形は種々に及ぶが、中に、大形の斐形土器の破片が含まれているため、斐棺墓遺跡の存在も考えられる。



第23図 中尾遺跡全景



第24図 堤ノ上遺跡全景



第25図 貝花尾2号墳遠景

貝花尾2号墳

公園建設課が遊歩道の設計変更を行ったため、改めて新路線内の分布調査を実施したところその存在を確認した。位置は、貝花尾の丘陵の南側斜面で、標高30m前後のやや平坦地を形成した場所に当る。この西側の近接地には、平尾炭鉱時代に住宅があり、当地が平坦な地形をしているのは、当時の人々が丘陵斜面を削平し畑地等に利用していた関係ではないかということで、遺跡の存在も予想しなかつたのであるが、樹木、下草等の伐採の結果、すでに墳丘及び石材の大半を失った横穴式石室が出現した。早速、公園建設課と協議の結果、再度の設計変更を

行い、遊歩道は丘陵の標部を通るようになった。そのため、当古墳の調査は周辺の地形測量とすでに露出していた石室の実測等を行った。また、石室の床面清掃時に盜掘の際に持ち出しき免れた副葬品の存在を確認し、取り上げた。古墳はすでに墳丘等が削平されていて正確な墳形等は不明であるが、直径10m前後の円墳ではなかったかと考える。内部構造は主軸をN45°Wにとり南東に向って開口する長さ約2.8m、幅約2.5mの横穴式石室である。遺物としては以下のものが出土した。

- ①土師式土器（壺） ②須恵器（豆、有蓋高杯、甕、提瓶、杯の身） ③直刀 ④鉄
鎌 ⑤鉄斧

大谷遺跡



第26図 古墳群遠望



第27図 大谷遺跡全景

月隈丘陵から派生し西方へ突出した標高50m～55mの丘陵は更に南方向へ緩やかに傾斜する台地を分歧する。遺跡はこの台地と尾根との分歧地点にあり、両側に谷頭を形成している。この地から上ノ浦池を挟んで席田中学校建設に伴って破壊された南西の丘陵には宝満尾遺跡があった。また当丘陵下方の標高10m～20mの位置には、上ノ浦池遺跡が存在する。

今回の調査では遊歩道の入口から160m入った地点の路線基準杭のNo.8～No.14までの幅10mを全面調査し、No.15～No.41までは試掘した。また尾根では試掘の結果3基の古墳を確認した。一方、調査途上で路線の設計変更を公園建設課より通知されたが、この部分においても試掘を行った。No.8～No.10までは標高30m～45mで、約20m前後の狭長な平坦部を有するがNo.11～No.14にかけてはテラス状の張り出しを幾つか形成しつつ緩傾斜する。

遺跡は生活址を主体とし、住居址12軒、溝状造構1、土塙1、柱穴多数を検出した。住居址の幾つかは標高30m～35mほどの丘陵平坦部に位置するが、大半は斜面のテラス状の張り出し部に位置する。また標高45m～50mの尾根の南斜面でも住居址が確認された。土器を伴った住居址からみて弥生時代後期前半から終末に及ぶ生活址であろう。住居址からは西新式土器に伴って青銅製鋤先片、その他小形の鉄斧、石斧、石庖丁、石鎌等が出土している。No.15～No.32の間は試掘の結果、住居址群の存在が予想されたため路線変更を求め、現状保存をはかった。

IX おわりに

席田遺跡群第1次発掘調査の概略は、以上述べてきたとおりである。遺跡の調査に至る経過あるいは、発掘調査の経過の中で触れたように、試掘調査なしの分布調査に基づいて本調査に至ったため、初年度の調査はいろいろな点でスムーズにゆかなかつたところがあった。

当席田地区が永い間の空白期からさめ、ようやく埋蔵文化財の実体が明らかにされつつある。しかも、江戸時代の記録等によれば、その当時でも数基の古墳の存在が知られていたようであるから、今後の調査の過程で相当の古墳の確認がなされるものと考える。また、当時から金隈周辺が古墳の多いということではよく知られていたようである。

さて、第1次調査の行われた貝花尾丘陵では、公園の予定地内で3ヵ所にわたって遺跡の確認および本調査が行われたが、貝花尾1号遺跡、貝花尾2号遺跡とも、その性格を明確にすることができなかった。今後、類例遺跡の増加をまって更に検討を重ねてゆきたいと思う。また貝花尾1号墳は、この地区の中では比較的古い様相を呈した石室構造をもった古墳であるが、やはり盗掘を受け、天井石等が消失していた。貝花尾1号遺跡を除いた他の2遺跡は、現状保存を行っているので、機会をとらえて、さらに詳細にわたって調査してみたいと考えている。

文 献

- (1) 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」 第12集 1971年(昭和46)
- (2) 福岡市教育委員会「福岡市博多区大字下月隈 宝満尾遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」 第26集 1974年(昭和49)
- (3) 福岡市教育委員会「福岡市持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」 第16集 1971年(昭和46)
- (4) ①貝原益軒「筑前国続風土記」
②青柳種信「筑前国続風土記拾遺」
③加藤一純「筑前国続風土記付録」 等
- (5) (4)の②

付 北ノ浦古墳

席田遺跡群の調査期間中に発掘調査事務所の北西100m足らずの丘陵上に石室の露出した古墳の存在を確認し、小字名を付して北ノ浦古墳とした。当古墳が現状保存されているため、周辺の地形図と墳丘図および石室の実測図を作製した。

古墳は、博多区大字東平尾字北ノ浦にあって、北ノ浦池と今屋敷池のある谷にはさまれた北東から南西へ延びる丘陵の先端部に近い標高27m～28mの丘陵斜面に位置している。また、当古墳の位置から南東に目をやれば、貝花尾1号墳のやや盛り上がった墳丘が遠くにのぞまる。

地形及び墳丘の測量結果からみて、直径10m以上、高さ2m以上の円墳であろうと考える。特に斜面に位置していることから南西部では3m以上の高さになるであろう。

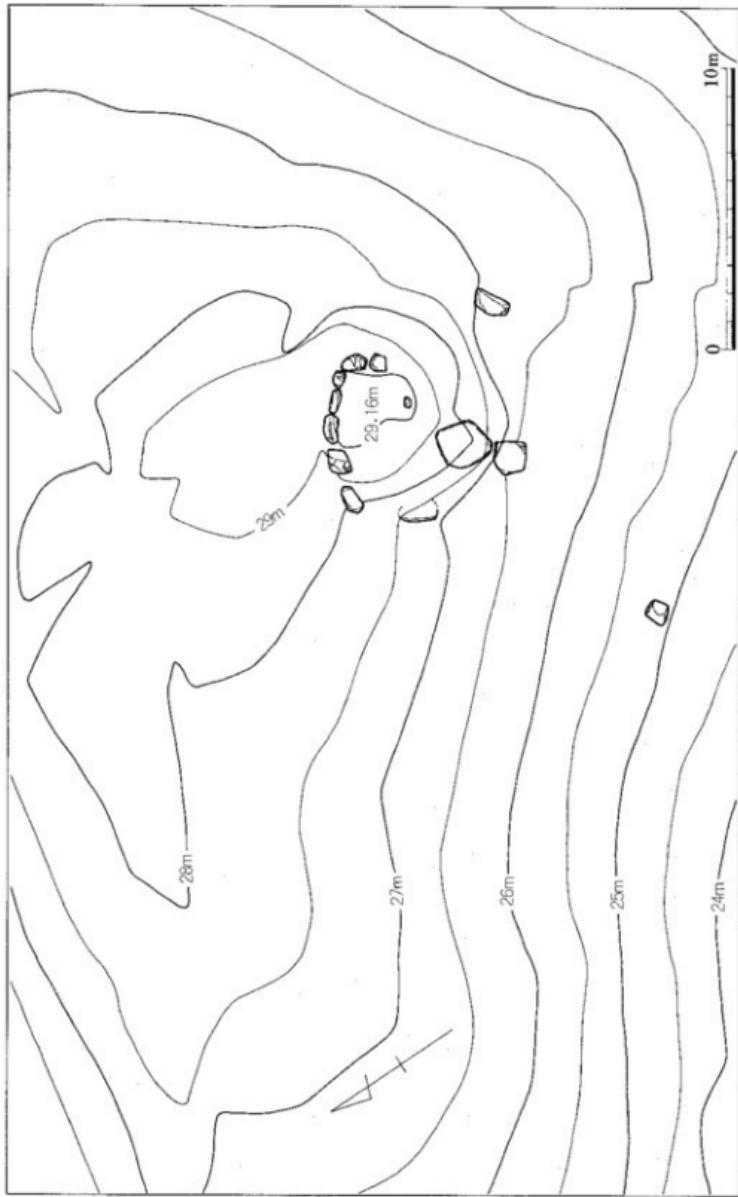
内部構造は南西に向って開口する横穴式石室であろう。石室の石材の大半はすでに抜き取られており、奥壁と北東の側壁の腰石の一部と床石の一部とを残すのみである。地元での聞き込みによれば、今から60年ほど前に盗掘を受けたとのことであったが、今回の床面清掃時に1枚の寛永通寶の出土をみたことから、すでに江戸時代かそれ以前に最初の盗掘を受けた可能性もある。石室の平面は、種々の状況から長さ2.8m以上、幅約2.7mであろうと推測される。また、石室の主軸はN42°Eをとる。床には全面に角礫が敷かれていたものと考えられるが、現状では奥壁寄りの部分と北東の側壁寄りの部分とが構築時の様相を比較的良好に留めているだけである。屍床は奥壁に平行に2つ設けられていることを確認したが、これらを奥壁寄りのものから1号屍床、2号屍床と呼ぶことにする。1号屍床は長さ約2.4m、幅約0.7mで、一方は石室の奥壁を利用し、他方は床に敷いた石と同様の角礫の比較的面取りの良好なものを立てて仕切り石とし、その頭が床面より10cm～15cmほど上方に出るように形成されている。また北東部は側壁との間に0.3mほどの空間をおいて仕切り石を立てている。2号屍床は1号屍床の仕切り石から10cm前後の空間をとって新たに仕切り石を設けており、長さ約2.4m、幅約0.5mで、幅が1号屍床よりやや狭くなっている。また、屍床面の高さは、2号屍床が1号屍床より5cmほど低く形成されている。

石室の実測図作製の折、過去の盗掘時の持ち出しをまぬがれた鉄鎌の残片その他若干のものが出土した。いずれも原位置にはないものと思われるが、屍床の存在とともに当古墳の築造年代及び埋葬の時期を知る唯一の資料である。

(第14～16図版)



第28図 石室の調査状況



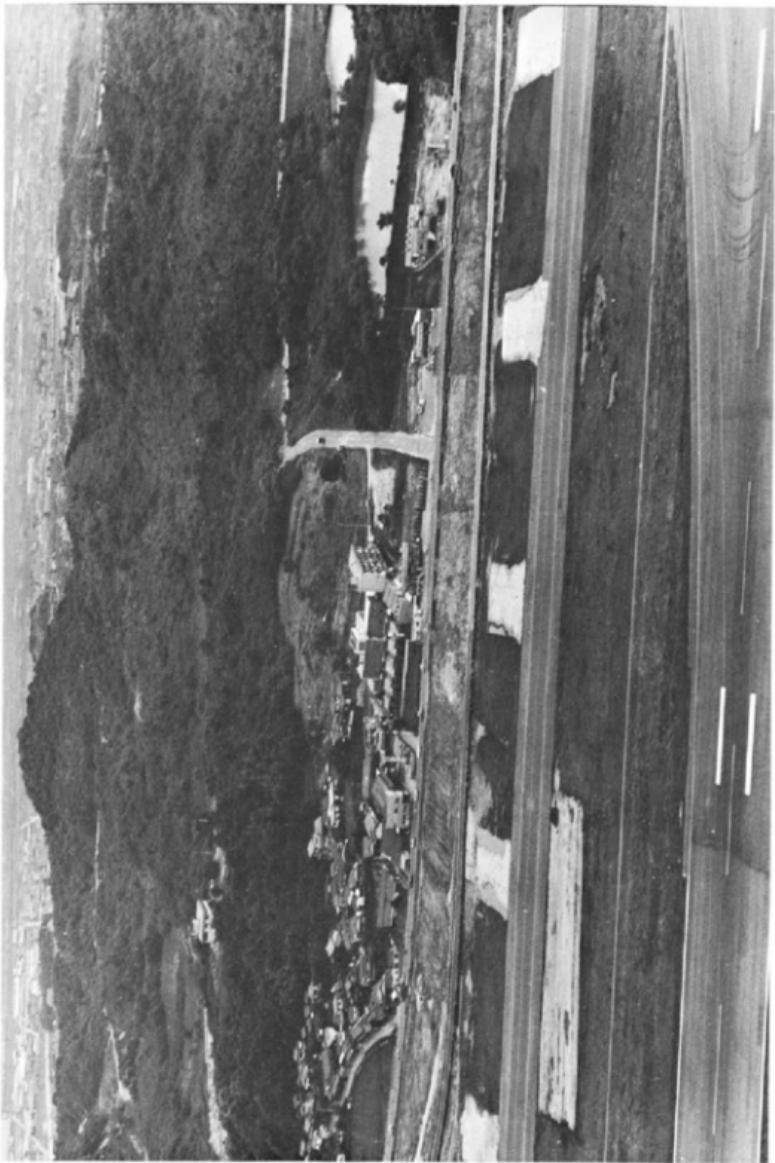
第29図 北ノ浦古墳地形測量図



第30図 北ノ浦古墳石室実測図

図 版

第1図版



席田遺跡群の遺景（西方より）

第2図版



(1) 空から見た貝花尾地区（南方より）



(2) 貝花尾1号遺跡の全景（北方より）

第3図版



(1) 貝花尾1号遺跡の溝状遺構（東方より）



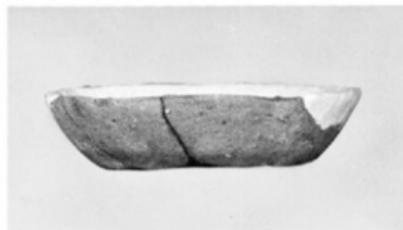
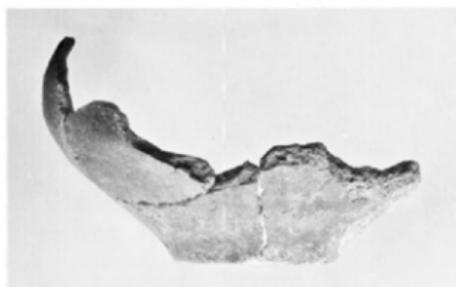
(2) 貝花尾1号遺跡の溝状遺構（西方より）



第4図版



(1) 貝花尾1号遺跡出土の遺物（石器）



(2) 貝花尾1号遺跡出土の遺物（土器）

第5図版



(1) 貝花尾2号遺跡の遠景（西方より）



(2) 貝花尾2号遺跡の全景（南方より）

第6図版



(1) 貝花尾2号遺跡の溝状遺構（南方より）



(2) 貝花尾2号遺跡の溝状遺構（西方より）

第7図版



(1) 貝花尾2号遺跡の岩盤露出状態（北方より）



(2) 貝花尾2号遺跡の土器出土状態（南方より）

第8図版



（1）貝花尾1号墳の遠景（南方より）

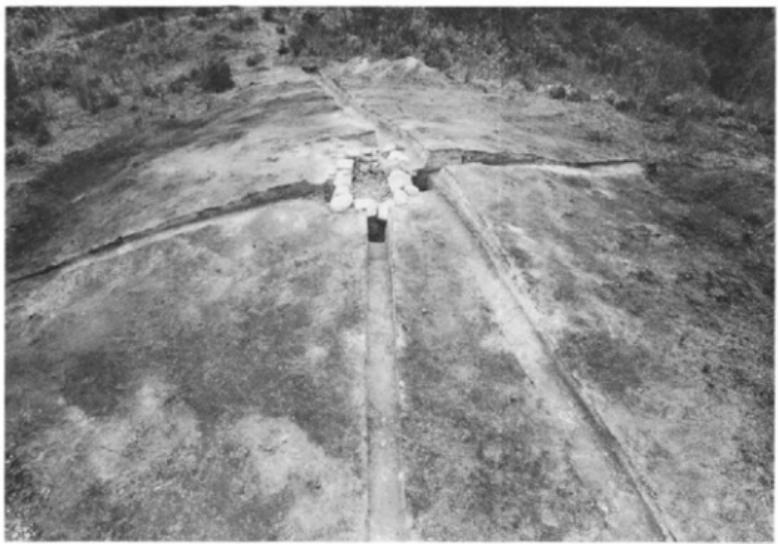


（2）貝花尾1号墳の近景（西方より）

第9図版



(1) 空から見た貝花尾1号墳（南方より）



(2) 貝花尾1号墳の全景（南方より）



(1) 貝花尾1号墳の石室（北西より）



(2) 貝花尾1号墳の石室（南東より）

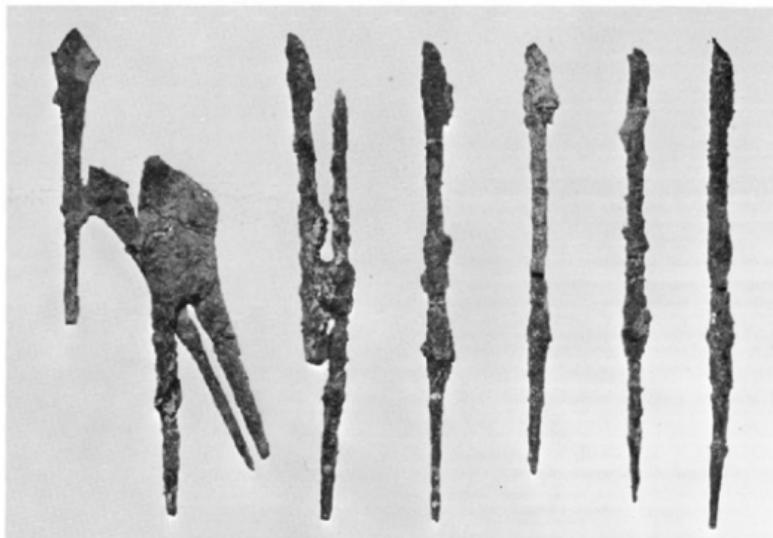
第11図版



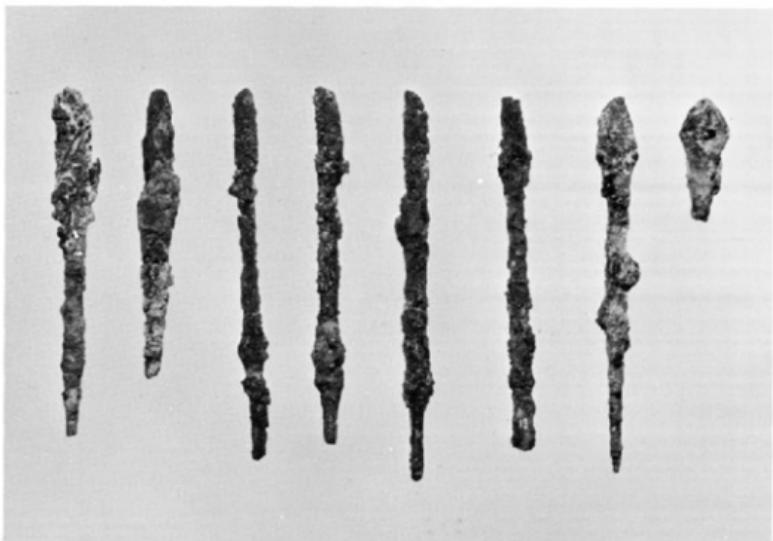
(1) 貝花尾1号墳石室内遺物の出土状態（南東より）



(2) 貝花尾1号墳石室内遺物の出土状態（北東より）

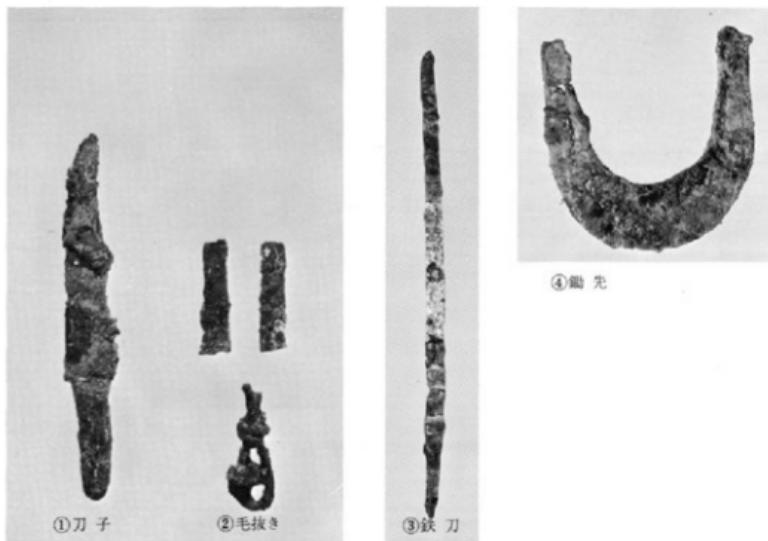


(1) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄鎌）



(2) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄鎌）

第13図版



(1) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（鉄器）



①須恵器



②土師式土器

(2) 貝花尾1号墳石室内出土の遺物（土器）

第14図版



(1) 空から見た北ノ浦古墳（南西より）



(2) 北ノ浦古墳の遠景（南方より）

第15図版



(1) 北ノ浦古墳の全景（西方より）



(2) 北ノ浦古墳の墳丘西部（南方より）



(1) 北ノ浦古墳の石室（南西より）



(2) 北ノ浦古墳石室内出土の遺物（鉄鎌）

福岡市 廣田遺跡群

第1次発掘調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集

1977年(昭和52)3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 ダイヤモンド印刷

席田遺跡群 第一次發掘調查概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集

福岡市教育委員会